

媒介論的現象学の構想

田口 茂（北海道大学）

フッサール現象学研究の現状を見ると、綿密なテキスト研究という点では、一定の到達点に達しているように思われる。しかしそれだけでは、フッサール現象学が本来もっていたポテンシャルが十分展開されているとは言えない。フッサールが本来思い描いていた現象学には、ある意味で素朴に、端的に、人々を共同作業へと誘うという側面があった。「事象そのものへ」という標語が、当初現象学を特徴づけるものと見なされてきたのは、そうした側面のゆえであった。初期の現象学に息づいていたこうした精神が、現象学研究の歴史的展開のなかで力を失ってきたことは否定できない。

ところで、そのような展開を妨げているのが、フッサール自身の語彙であるということも、否定できないように思われる。フッサールが用いる「主観性」と「意識」に関連する語彙は、それにいくら「超越論的」という形容詞を冠したとしても、やはり現象学を狭い意味での意識のなかに押し込めてしまうように見える。それによってわれわれは、現象学が本来問題にしていた「事象そのもの」を、容易に見失ってしまう。

現象学が、狭い意味での意識の外に、最初から出てしまっているということを、これまでの現象学研究は十分に示してきた。「志向性」というものを正確に解釈するだけでも、この点は十分に理解することができる。「志向性」とは、いつもすでに、私の実的な体験を超えたものとの関わりであり、そこにおいて、われわれはいつもすでに間主観的で公共的な事態に関わっている。問題は、われわれが最初から意識の外に出てしまっているという、この本来の意味で「自然な」事象そのものを記述する語彙が、自然的言語に欠けているという点である。それゆえフッサールは、たとえば「超越論的」という形容詞を用いて、既存の語に新たな意味を負わせることにより、暫定的に進んでいく方略を選択したのであるが、現代の現象学研究は、こうしたフッサールの暫定的方略を批判的に吟味し、それに対する修正提案を提出しようところまで成熟しているのではないか。

もちろん、ハイデガーをはじめ、メルロ＝ポンティ、フィンク、パトチカ、マリオンなど、フッサールの現象学に対して、現象学の批判的改鑄を企てた哲学者はすでに多く出ている。だが、ここで提案しているのは、フッサール以外の「大哲学者」の研究に向かうのとは別に、「小研究者」の共同的事象研究という初期現象学の精神を、部分的ではあれ、再び蘇らせることができないか、ということである。そのための「語り方」の検討が、まずなされるべきではないか。既存のフッサール現象学研究の枠組みを尊重した上で、その成果に対して、新たに工夫された表現を提案し、相互に吟味していくことから、この作業を開始することができるのではないか。

ここでは、そのような一つの提案を行いたい。それは、現象学に「媒介」の語彙

を導入するということである。フッサール現象学は、それを持ち出すことによって思考が停止してしまうような、行き止まりとも言える語彙を多く残している。「主観性」はその一つであるし、「本質」、「明証」、「自我」、「間主観性」といった語彙は、いずれも、それを持ち出すことによって話がより具体的になるよりは、「わかったようでわからない」ものに議論を投錨させてしまう面がある。しかし実際には、フッサールの現象学的分析は、こうした語彙を絶えず具体的な事象のなかに置き直し、具体的事象をより明確に浮かび上がらせるための「媒介点」のようなものとして用いている。

現象学が、「行き止まり」となるような実体的なものを提示しようとするものではないということは、すでにこれまでの現象学研究が十分に明らかにしている。それにもかかわらず、上に挙げた「本質」「自我」「間主観性」等々の語の理解は、現象学をめぐるこれまでの言説において、どこか実体性を払拭しきれていない面がある。本稿では、これらの語からさらに徹底して実体性を抜き取り、これらの語をまさに「媒介」そのものの標題として理解することを試みる。分析そのものの内容を大きく変えるわけではないが、アクセントの置き方をやや大胆に変えていくことを試みたい。

その際、発表者の発想の背景にある田辺元の「媒介」概念についても、簡単に示唆することにしたい。田辺は、一見自体的・無媒介的に成り立っているかのように見える存在者（有）を、それ自体「媒介的」な出来事として、媒介的現実がとる一つの形（空有）として受けとる。無媒介であるかのように見えるということそれ自体が、媒介の一つの形なのである。こうした発想に親和的な分析は、フッサール現象学の各所に見られる。本発表では、現象学のもつそのような側面をいくつか取り出してみたい。時間上の制約のため、限られた論点についての、ごく概略的な議論にとどめざるをえないが、この考察が今後の議論の小さなきっかけとして役立つことを期待したい。